

2021 年度下半期報告書



信州大学山岳会

プレ冬合宿		八ヶ岳	ジョウゴ沢アイス
冬合宿		八ヶ岳	赤岳主稜/中山尾根
10月		北アルプス	霞沢岳
頸城山域	鍋倉谷	八ヶ岳	広河原沢右俣
山梨県	瑞牆山	南アルプス	尾勝谷右俣アイス
西上州	荒船山	1月	
北アルプス	八峰キレット	中央アルプス	宝剣岳極楽尾根
八ヶ岳	1年生山行	北アルプス	白沢天狗岳
北アルプス	餓鬼岳	北アルプス	常念岳東尾根
北アルプス	穂高岳	八ヶ岳	北八ヶ岳
11月		八ヶ岳	天狗尾根
小川山	烏帽子岩左稜線	頸城山域	妙高山
明星山	マルチピッチクライミング	北アルプス	七倉岳南尾根
妙義山	木戸壁/相馬岳北稜		
12月		城ヶ崎海岸事故	
富士山	吉田ルート		
八ヶ岳	裏同心ルンゼ/小同心		
北アルプス	唐松岳八方尾根		

プレ冬

<日程>

2021年11月27日～2021年11月29日

<メンバー>

竹田(4)、川地(4/L)、大島(3)、河内(3)、坂井(3)、加藤(1)、和田(1)

<行動記録>

1日目 天気：雪

9:00 とおみ駅

9:55 リフト頂上駅

10:05 地蔵の頭

14:40 馬の背二ノ髪付近 引き返す

15:00 馬の背一ノ髪付近幕営

今年は例年よりも雪が多いためスキー場は11月25日からオープンしていた。新谷先生のご厚意によりゴンドラの往復券を頂き、無料で使わせて頂いた。リフト頂上駅以降は本格的なラッセルになり、新雪が非常に多かったため最低でも腰ラッセルとなった。地蔵の頭から少し下った所で社会人パーティーに追いつき、その場の流れで一緒にラッセルすることとなった。1年生は初めてのラッセルが腰～胸のラッセルとなり、体力的に非常にしんどそうだった。小遠見山を目指して頑張ったが時間的に厳しかったため、二ノ髪付近で引き返し、一ノ髪付近で雪訓できそうなスペースがあったので、その近辺をテン場とした。

2日目 天気：晴れ

5:00 起床

6:30 訓練開始

14:40 訓練終了

訓練の流れは、クロスサーチ→シミュレーション→埋没訓練という流れで行った。1年生の人数が少なく上級生の人数が飽和していたため、上級生(特に3、4年生)も自然に訓練に参加できた。そういう意味では非常に充実していたと思う。1年生の掘り出しスピードがやや遅いことが心残りであった。ちなみに埋没訓練では、昨年埋まらなかった内藤と1年生全員が埋まった。

3日目 天気：曇り

(先発)

3:00 起床

3:35 幕営地発

4:30 アルプス平駅

5:00 エスカルプラザ
(本隊)

4:00 起床

6:35 訓練開始

7:30 訓練終了

8:05 幕営地発

8:50 地蔵の頭

8:55 リフト頂上駅

9:30 とおみ駅

前日の1年生の掘り出しに技術に心残りがあったので、2隊に分かれて、搜索から掘り出しまでの訓練を行った。先発と後発で分かれているのは、大島と坂井が授業の関係で早めに下山しなければいけないからである。



<反省>

竹田 (4)

今年度のプレ冬は4年間を通じて最も積雪量が多く、特に支障なく開催できた。ラッセルも半端ではなく、常時腰以上、斜度によってはオーバーヘッドラッセルになるほどで、小遠見山手前、馬の背二ノ髪まで到達、その後下って少々広めの稜線上に幕営した。総括としては、全体的にビーコンサーチの精度の低さが目立った。私自身、かなり精度が低く、会のリーダーとして情けない姿を露呈してしまい申し訳なかった。また、新雪で軽く締まりのない雪だったため掘り出し・埋没ともにその苦しさを体験するのには少々物足りない感も否めない。特に掘り出しに関して、ブロック状に切り出して掘るという基礎的な動作を体得させることができなかったのが残念だ。訓練の雰囲気ももっと引き締まった緊張感のあるものにできるはずだしそうすべきだ。リーダーとしてどこか不完全燃焼感のあるプレ冬になってしまったというのが正直な感想だが、きっとその要因の大部分を占めるのはクロスサーチを外しまくるなどといった自分の至らなさから来るものだと思う。

以下、来年度以降につながる反省点・改善点

を列挙する。

- ・プレ冬では一年生に天気図を描かせることより生活の流れを身に着けてもらうことを優先した方がよい。結局何もせずに終わってしまったのではこの合宿の意味がない。

- ・複数埋没の際のフラグ機能の説明を忘れない。また、会として、まず一人に集中するという方針を確認するとよい。

- ・訓練はケツの時間を適正に設定した上で、徹底的にそれを守るように運営していく。今回はとてもスムーズに運営が流れて充実した内容となった。訓練中のこまめな休憩も必須。

- ・ゴンドラリフトを下りてからの指示の少なさが目立った。はじめてで何もわからない一年生に対する指示や配慮の意識を上級生は常に持つておくべきだ。

さて、今年もどうやらなかなかよさそうなラニーニャが来ているらしい。年度末の奥大日-劔岳の総決算合宿を見据えて、会全体として着実なステップアップを図っていきたい。まずは冬合宿・早月尾根。丁寧に取り組んでいこう。

川地 (4)

①係の反省(装備係)

- ・大きな反省は団体装備において、漏斗を忘れたこと。山行準備の際に上級生が誰一人気づかなかったのは非常によろしくない。1年生に落ち度は無いです。

- ・合宿のような山行の場合、医療缶の袋をもう少し大きいサイズがあるといいと思った。もっていく薬の量が多いのでどうしても医療缶がパンパンになってしまう。それが原因でチャックの部分が壊れることがあり、今回も見事に破損。

②その他の反省

・テント内の生活力が全体的に落ちている。具体的な失態としては和田のマットの上に後に茶をこぼした事。冬において、テント内の濡れは死活問題。和田には非常に申し訳なかった、ごめんなさい。生活力が全体的に落ちている原因としては、10月～11月の秋シーズンにおいて山にあまり入っていませんでした。これからの週末山行を通して、リハビリもかねて生活力を取り戻していきたい。

・3日目のクロスサーチ訓練において、7:30に終わる予定であったが、少し過ぎてしまった。時間通り終われなかった原因としては、最後に余った10分で加藤泰造にクロスサーチ訓練を執行させてしまったことである。思いのほか泰造がクロスサーチを外しまくり、10分で掘り出しまでを行うことができなかった。前日の雪訓で1年生の掘り出し能力が未熟なことが分かっていたので、クロスサーチは省いて、掘り出しのみ行うなどをすれば7:30に間に合っていたと思う。

・今年度のプレ冬は、例年よりも遙かに多い積雪であった。ラッセルは常に腰以上、テント内環境は例年よりも遙かに過酷だっただろう。1年生には冬山の大変さをたくさん伝えることが出来たと思う。冬山の美しさの部分は今後の週末山行で伝えることが出来たら良いと思う。

大島 (3)

まず、アイゼンのペイルを変えていなかった。家まで取りに帰っていたので、遅刻と何ら変わらない。今後はこのようなことがないように気をつけたい。

また、先頭でラッセルしている時に先に進みすぎて、後ろの隊と違うルート取りで離れてしまったことも反省。

最後に、ヤッケ下の穴を下界で直してくるのを忘れており、ラッセルで下半身がかなり濡れた。来週までには直しておきます。

河内 (3)

生活・行動と雪訓を分けて反省する。

まず、生活・行動である。一つ目は、装備の故障がいくつか見られた。サングラスの柄が割れていたり、スパッツが破れたりした。正直、金銭面で買い換える余裕がなかったのが現実だが命には変えられない。直す。二つ目、会として装備忘れが多すぎる。夏合宿でも忘れたが今回もジョウゴを忘れた。最近の傾向で誰かがやってくれるだろうという他人任せな空気が会に流れている。冬合宿ではいい加減直したい。皆さん頑張りましょう。三つ目、一年生に冬生活をほぼ行わせていない。夏よりもやる事が多く、特殊なことが多い冬生活をしていないことは今後大きく影響するだろう。天気図を描くことが面倒な上級生の気持ちもわかるが生活を優先させましょう。

続いて、雪訓である。一つ目は、同期に対し私は甘いと感じる点である。スコップをそこら辺に置いて私が直す、一年生がやると叱責する。矛盾だ。私がこれをされたら気分が悪い。同期にも怒ろう。同期の皆さん覚悟しといてください。二つ目、見本が良くなかった。予めシナリオを想定して、練習しておくのも救助として疑問を感じるが、少なくとも見せるという点で完璧でなければならない。ビーコンサーチくらいは一発で当てよう。

最後に感想として、今回のプレ冬は最高の冬山のスタートだったと思う。一発目から腰を超えるラッセルがあり、ラニーニャに改めて感謝したい。3年目の冬山だ。馬日さんは3年目から冬山は楽しくなるとおっしゃっていた。さてさて、今年はどうなるのか楽しみだ。安全第一で臨もう。

坂井 (3)

今回のプレ冬の良かった点を挙げるとすると、それは雪が多かったことだろう。例年は営業前の五竜スキー場においてゴンドラを動かしてもらうが、今年はずでに営業を開始していた。そのため冬シーズン一発目で年末にも匹敵するようなラッセルをすることができた。しかしそれがために進むペースが遅く、小遠見山にすら辿り着くことができなかった。そのためいつもの西遠見の吹き溜まりとは違う場所でセクションを行うこととなった。いつもの場所は適度な斜度があり、埋没訓練をやるための雪量もあるので訓練には適している。しかしたくさん降雪があったとはいえ、小遠見山までは基本的には尾根地形なのでそのような地形はなかなか無い。現在の部員にとってこのような大雪のプレ冬は初めてのことであった。そのためせつかくのラッセルの歩行練習も行いたいところだが、もっとセクション場所を探すことに時間をかけたかった。なぜなら今回のメインは雪崩捜索訓練なのだから。この異例の大雪は個人的な反省も残した。例年の感じでそこまで寒く無いことを予想していたので、あまり防寒着を持ってこなかった。そのためラッセル中もかなり寒い思いをした。また1年生に対してもしっかりと声かけをしてあげることがで

きなかったように思う。これからの山も大量の降雪が予想されるので気を引き締めて行きたい。

エッセン係

α 米の量や何がどこの袋に入っているなど、係として把握しなければならないことが把握できていなかった。またこれは装備係とも関わるが、エッセン道具であるコッヘルに漏斗が入っていなかった。冬の一発目としてしっかり冬仕様の装備を忘れないようにしたい。

内藤 (2)

私のプレ冬に関しての反省を訓練、生活・行動、係に分けて行う。

まずはじめに訓練についての反省を行う。最初に反省すべきは、自分の練度の未熟さ、雪崩レスキューシステムの理解の浅さであろう。私は会2という立場から、シミュレーション訓練においてリーダーの立場を任せられることが多かったが、私の指揮采配はお粗末なものであった。詳細には言及しないが、リーダーとしての職務を自覚していなかった。また訓練中の余裕の無さから下級生をみることがほとんどできず、アドバイス等も逐次行うことができなかった。会2が1人しかいないという状況から、必然的に上級生に運営の補助をお願いすることになるが、上級生との打ち合わせが不十分で、訓練の進行が乱れたりもした。今後の機会はあまりないが、同期がいないという状況からも上級生との打ち合わせは念入りに行いたい。そして、埋没訓練時の説明が不足していた。第一に埋没訓練は危険度が極めて高い訓練である。そして去年私はその体験を実施していない。あってはなら

ないことだが、去年自分自身が体験していないことをうまく説明することができなかった。1年生には申し訳ない気持ちである。補足して下さった上級生の方々ありがとうございます。最終日の訓練で終了時刻を守れなかった。1年生がこれまでのできとは裏腹にクロスサーチを外しまくり、思いの外時間がかかってしまった。訓練終了予定時刻数分前には有無を言わず切り上げ、掘り出して訓練を終了すべきであった。最後の複数埋没シミュレーションでは上級生同士の連絡不足から、中途半端なものになってしまった。訓練として非常にもったいなかった。

つづいて、生活・行動の反省を行う。テント生活の力が落ちていて、そんな自分にイライラしていたように思う。早くテント生活の勘を取り戻せるように努力したい。そして自分のマットの上に水をこぼしてしまった。濡れは大敵である。反省したい。行動においては、ラッセル力が足りていないことを痛感した。上級生であるならば、もっとパワフルなラッセルを行えるようになりたい。空荷ラッセルの有効性を実感した。場面に応じて取り入れていきたい。一度1年生にラッセルの最後尾を歩かせてしまった。冬山初心者であること、上級生がたくさんいることに甘えていた。このような危機管理では1年生を山に連れて行くことはできない。反省したい。多くの人が反省するとおもうが、忘れ物があった。冬合宿ではこのようなミスは絶対にしないように気をつけたい。

つづいて係の反省を行う。記録係に関しては反省等はない。気象係に関しては、今回高層天気図を導入したが、冬ゼミ以上の

知識がなく、竹田さんに見せるだけになってしまった。今後も有用であると思うので、高層天気図の読み取り方をマスターしたい。

加藤 (1)

まず、今回のプレ冬で反省することは、遅刻をしたことだ。冬山第一回にあたる重要な山行であるのに、気が緩んでいた。遅刻は山に入る以前の問題だ。また、自分の信用も失っていくことになる。今後、このようなことが起こらないよう気を引き締めて山行に臨む。

次に、行動面、生活面、雪訓での反省を述べていく。

行動面では、ラッセルの体力が圧倒的に足りない。雪に沈んでいくばかりで全然進まなかった。下界で体力作りはできるため、体力をもっとつける。また、二日目にビーコンの充電が切れた。これはビーコンの確認を適当に行っていたミスである。ビーコンがつくことだけを確認して充電の残り残量をよく見ていなかった。冬山においてビーコンが動かないのは撤退も余儀なくされることである。自分の命やパーティーの仲間の命もそのミスによって失うことになるかもしれない。確認を大雑把にせず、しっかり行うことを徹底する。ワカンの装着やオーバー手の装着が遅かった。冬で他の人を待たせる行為は夏に比べさらに悪いことだ。凍傷のリスクが高まるなどリスクが大きくなるからだ。この装備の装着が遅いのは、オーバー手をした手での作業に慣れていなかったことが理由である。素手に比べ扱いづらい手になるため、下界での練習をする。練習すればするほど早くなっていくことなので下界での練習でスピードを上げる。

生活面では、生活が遅かったことが挙げられる。上級生の冬の生活感に全くついていけなかった。冬の生活は夏の生活の延長線上にあるが、自分の生活力の無さを実感させられた。冬の生活の流れを覚えて上級生の生活のスピード感についていけるよう、今後の山行では次は何が行われるか考えながら生活を行う。テント内に水をこぼすこともあった。冬は濡れに対して敏感にならないといけない。水を他の容器に移し替えるような行為をするときは、下にコッヘルやコッヘルを敷いておくなどして万が一こぼしてもテントの中は濡れないようにする。

雪訓では、クロスサーチが一発で当たらなかった。実際に雪に埋められる経験もしてみ、レスキューにおけるスピードの重要性を身に染みて実感させられた。クロスサーチを一発で当てるか当てないかは掘り出すまでの時間が大きく変わってくる。正確なクロスサーチは相手の命に直結する。クロスサーチは下界で練習できるので、練習によってもっと精度を上げる。雪の掘り方も良くなかった。雪をブロック状にして後ろの人に渡すように掘る掘り方が効率が良い。しかし、私が掘った雪はブロック状にならず崩れてしまっていた。また、掘ることに精一杯になってしまい、雪を後ろの人に渡すようにではなく投げるようになってしまい、せっかくブロック状になっていた雪を崩してしまっていた。レスキューは効率が重要であるため、雪の掘り方も意識するようになる。

初めての冬山は、同じ場所でも夏山と大きく異なるという印象を受けた。より厳しくなる冬の環境についていけるよう頑張り

たい。

和田 (1)

私は、本格的な冬山に入ったのはこれが初めてだった。不安に包まれながらの入山であったが、今山行で冬山とはどんなところかということをし少し感じることができたと思う。以降、今山行での反省点を雪訓、行動、生活に分けて書いていく。

雪訓の反省の前に全体の反省として、返事をしないということがあった。これは山に入る以前の問題である。今後このようなことがないように、肝に銘じておく。

雪訓の反省は、第一にクロスサーチの精度が低いことだ。クロスサーチを一発で当てるか当てないかで、埋没者を救出する速度が大きく変わってくる。クロスサーチを外すことは仲間を殺すことに直結するので下界で練習したり、今後の山行で練習をして、一発で当てられるような使える技術にしたい。また、埋没者を助けるという気持ちが足りないと感じた。私のシャベリングからは、仲間を助けたいという気持ちが伝わってこないと思う。一番つらいのは埋没者なので、その人を助けるために死ぬ気で掘るようにする。埋没体験をしたが、雪の中は光が全く届かず、雪の重みで呼吸も苦しく、この状態で死にたくないと思った。いかに救助のスピードが大事なのかを感じることができた。もし仲間が雪崩に巻き込まれたら絶対に助け出さなければならない。絶対にあきらめてはいけない。

行動の反省は、わかんの着脱、衣類調整、オーバー手袋の装着などの行動がとても遅かった。このままでは、先輩を待たせてしまい、隊全体の行動も遅れてしまう。これらは

下界で練習しておく必要がある。

最後に生活の反省だ。夏よりもやる事が多くて神経質にならないといけないことも増えた。先輩に指示されて作業することが多かったが、今後の山行で積極的に生活に参加し、自分の体にしみこませて早く生活の流れを覚えたい。

私は冬山の透き通った空気、夏とは違う白い景色に魅了された。今回学んだことをいかし、全力で冬山を楽しみたい。そして、山ヤとして強くなる。まだまだ未熟ですが一緒に山に行ってくれる上級生の皆様、これからもよろしくお願いします。

冬合宿

記録

2021/12/25

5:25 車道最終地点

6:35 伊折ゲート

8:25 馬場島

9:10 馬場島発

11:00 松尾平

11:20 1030 m 付近テン場

2021/12/26

4:00 起床

6:05 テン場発

10:00 1551 m

13:40 1880 m テン場

2021/12/27

沈殿

2021/12/28

4:00 起床

6:35 発

7:15 1920 m

12:05 早月小屋

>雪洞作成

>偵察隊

13:00 早月小屋発

15:20 2460 m

15:45 撤退開始

16:15 早月小屋着

2021/12/29

3:30 起床

4:05 発

>先発隊

5:20 2450 m

7:20 2614 m

9:30 撤退開始

13:00 2450 m

13:30 早月小屋

>後発隊

9:40 2614 m 撤退開始

15:15 早月小屋

2021/12/30

沈殿（雪洞作成）

2021/12/31

沈殿

2022/01/01

7:00 起床

9:30 早月小屋発

10:20 2224 m

12:50 1920 m

14:20 1551 m

17:00 松尾平

17:25 馬場島

馬場島テン泊

2022/01/02

5:30 起床

8:30 発

10:00 伊折ゲート

10:40 車道最終地点



反省

加藤泰造（会1）

冬合宿。厳冬の剣岳に9日間入り、様々なことを学んだ。

その中で最も大きな反省は、滑落したことだ。剣へのアタックの日、私はナイフリッジ上で3メートルほど滑落した。フィックスロープが気に引っかかっており、それを取ろうとトレースを外れたところ、新雪を踏み抜き滑落した。あれほど言われていた、「落ちるな」ということを実際にやってしまった。竹田さんの作った支点のおかげで止まったが、それが無かったら下まで落ちていただろう。あの時、私はトレースを外して危ないほうへ行くことになるというのに、そこまで事故への恐怖感を抱いていなかった。まさか自分が落ちるとは考えていなかったからだ。しかし、事故というのは、事故が起こらないと思っている時ほど起こるものである。落ちるかもしれないという気持ちが行動を慎重にさせ事故を回避する一つの手段になる。事故るかもという意識を忘れないようにする。また、今回のようにトレースを外さないといけないなど、危ないと思ったらすぐに上級生に助けを求めることも重要だ。分からなくなったら、上級生に質問すれば何かしら対策を立ててくれる。1

年である私はまず自分のことを考えて、少しでもやばいと感じたら上級生に助けを求めるようにする。今後、二度と落ちないようにこれらのことを心に刻む。次に、頬が凍傷になりかけたことだ。これも剣アタックの日に起き、風が強い稜上で頬が少し日出帽から出ていたことが原因だ。気づいたときにすぐ覆ったことで凍傷にはならなかったが、あのまま出しっぱなしにしていたら凍傷になっていた。気づいたらすぐ覆い、なるべく肌を外に出さないよう注意する。装備の紛失もした。雪を落とす用のブラシを失くした。その時、テントを出たのが私が最後であったため、私の不注意だった。小物類は雪の上に置いておくとすぐなくなるため、ポケットに入れておくなどしてなくさない対策をする。火器の扱いが雑であり、炎上させたり、テントに火が付きそうになったりした。今更火器の扱いなど言うてはいられないため、初心に立ち返り、慎重に火器を扱うようにする。 今回の山行は頂上を踏むことはできなかったが、自分の中で大きな経験になった山行だったと感じる。この経験を今後に活かしていけるようにする。

和田一步（会1）

今回の冬合宿で本当の冬山を知ることができた。結果的には山頂に立つことはできなかったが、たくさん得るものがあった合宿だと思う。以下今合宿の反省を行動、生活に分けて書いていく。

まずは行動の反省として、私はトラバースしているときに足を踏み抜いて落ちてしまった。すぐ止まったからよいものの大きな事故になりかねなかった。まだまだ歩行技術が未熟だと実感した。ロープを出す出さ

ないにかかわらず、絶対に落ちてはならないということをこれから徹底していく。このほかにも全体的にわかん、アイゼン歩行技術が未熟であった。今後の山行で意識して、少しでも早く歩行技術を上達していきたい。次に、行動中の読図が足りていなかった。歩くのに必死で地形図を見る余裕がなかったので、体力をつけようと思う。また、自分が読図したときは上級生の方に見てもらうなどして、自分の読図力を上げていきたい。来年度からは上級生の立場になるので、確実な技術を身に着ける。最後に、まだ返事がないことだ。山岳会を始めたころからずっと言われているのにいまだにできていないことが恥ずかしい。行動中だけでなく、普段から意識するようにする。

次に生活の反省を上げる。第一にテントの出入りが雑であった。テントに入るまでの準備が遅かったり、テントから出るときに、コッヘルをひっくり返しそうになったり、干していたものをおとしてしまった。このことでほかの人に大きな迷惑をかけてしまった。今後は周りの人への気遣いを忘れずにしたい。

今合宿では冬山の美しさ、そして過酷さを、身をもって知ることができた。これからもいろいろな山に登り、経験を積んで強くなりたい。

内藤悠士（会2）

・係の反省

私が腕時計をテン場で紛失したため、時間を周囲の人に聞かなければいけない状況になってしまった。そのために周りの人にご迷惑をおかけしてしまった。山での装備の紛失は危険を招くし、時計の紛失は手痛

い。気象係の反省については、気象の知識が曖昧であったことである。事前に冬山の気象を学んで今合宿に望んだが、明後日以降の長期的な予報が不正確であり、長期的な見通しを持てなかった。事前に高層天気図を数日分印刷して持ち込んだのは良かったと思う。

・生活の反省

個人的な反省としてあげるとすれば、個人装備の不良が多かった。腕時計を紛失し、雨蓋のファスナーを壊してしまった。またインナーブーツを乾かすのを怠り、翌日濡れていることがあった。会2になった身として、装備を見直しVBL等の技術を取り入れ、向上させていきたい。また今合宿で、シュラフやブーツのアウターについた水滴をタオルでこまめに拭き取ることで、濡れを大きく軽減させることができた。今後も続けていきたい。

・行動の反省

今合宿では会4の監督のもとさまざまなfix工作を行った。そのなかでもやはり動きが効率的ではない。今回1年生がフィックス中に転倒し、fixがなければあわや滑落という事態になった。聞いたところによると、fixがハイマツに引っかかっており、それを外しに行こうとしたところ足を滑らしたそう。1年生がその行動を危ないと認識していたかどうかは不明だが、そのときに上級生に相談がなかったことが非常に残念である。それと同時に1年生が信頼して頼ってくれる上級生にならねばならない。正直、今の私は他の上級生と比較して実力、経験が足りないだろう。確実な信頼を勝ち得られる上級生になれるように努力したい。リーダーとして誰に何をお願いして、1年生

に任せられることを任せるなどして効率的にチームを動かしてく術を学ばなければならない。また強風のため上級生との意思疎通が疎かになっていた。これは危険である。今回はじめて雪洞を作成したが、大変良かったと思う。このような経験はめったにないので沈殿日など余裕があるときにやっても良いと思う。何より1度作成した経験があると安心感がある。感想としては意外と大変であった。ここに今回私が得たコツをまとめておく。1つ、事前にプロービングして雪洞を作成しようとしている空間に障害物がないか確認する。今回は早月小屋の吹き溜まりに雪洞を作成したが、長時間費やしてほっていた途中で障害物があるとわかり時間を浪費してしまった。2つ、スノーソーは内側で掘る人数分あったほうが良い。雪洞内部、特に下層の方はスノーソーがないと掘り進められないほど固くなっていた。またスノーソーで切り出したほうがはるかに効率的に雪を雪洞外へ排出できる。



大島龍太（会3）

・医療係

正露丸を忘れた。原因として装備チェックのとき僕が点検していなかった。濡れへの危機感が一部の人以上欠如していた。特に今回は入山が雨だったので、カッパ

を持ってくる指示を出せばよかった。

また、体調チェックを他の上級生に任せすぎた。ビタミンE剤が少なかったので、今度からは塗るタイプにしたい。

・生活

坂井のゴーグルをイライラして投げた。元は僕が貸したヤツだから自業自得だが、気をつけたい。

白ガスを使いすぎた。年末に山に入る時は、予備日のガスの量を少し増やしてもいいかも。初日から3日目までネオプレーンの靴下を脱がずにいたので、足にでき物ができていた。ちゃんと乾かします。

また、雪洞の雪かきをやる人とやらない人の差が激しかった。今度からは時間とメンバーを決めてやりたい。

・行動

アタック先発隊のとき、土嚢袋を忘れた。また、後発隊のスノーバーを回収し忘れた。残置は良くない。

あと、先発隊はノーロープで行き過ぎた。急な雪壁のラッセルが怖かったので出すべきであった。

スパッツのチャックが壊れて途中から左足だけしてなかった。壊さないようにします。

・まとめ

まとめとして今回の冬合宿では、率先して皆が嫌がることをやるように心がけた。

もちろんこれは来年のCLとしての自覚を自分に叩き込む為だ。

同期は僕含めて皆面倒くさがりなので、誰かがやらないと会として機能しない。

そうなれば事故は免れない。

僕は来年度こそ事故無しでいきたい。

その為にも、会全体の模範となるように務めていくつもりだ。

河内皓亮（会3）

この冬の劔岳は遠かった。そう強く感じる。いや、私がこの山域について深く理解していないだけで例年通りであったのかもしれない。いや、私が精神的にも肉体的にも未熟であり、山に負けたというよりも自分に負けただけなのかもしれない。登れなかった理由は数えればきりがないだろう。1つ挙げるとしたら、山に対して謙虚な姿勢ではなかったと感じる。当初の予定では、劔岳は奥大日尾根から目指す計画であった。しかし、1年生の技量・上級生の技量・この時期特有の気象条件から顧みてもリスクの高い計画であった。そのために下降路の偵察に重きを置いた早月尾根からのアタックという言わば、置きにいく山行となった。そこで出た感情は、たいしたことないだろうという山に対して謙虚に欠くものであった。今思い返せば、ここからこの山行は敗退が始まったのだろう。実際、山行が始まったらどうだろうか。次の日になってもいないのに明日は荒天だろうからと沈殿を前日に決め込み、実際は少しでも進めたであろうところ動かなかった。これが1つの原因として28日の好天を逃した。非常に悔やまれる。29日の午前は確かに晴れたが9時頃からホワイトアウトになり始め、敗退を決めた。ここを逃すともうチャンスは無いというのに。同じ過ちを繰り返さない為にも今後の厳冬期劔岳を登るうえでの留意したい点について、いくつか示しておく。

1つ目は、この時期の天候である。例年通りこの時期はクリスマス寒波と年末年始寒波の2大寒波が連続して到来する。年内に山頂を落としておきたいなら28日前後をア

タック日としそれまでに最終キャンプに入るべきだ。また、この寒波の間はおよそだが1日分好天が持つのが限界だと感じる。そして、この中日で山頂を落とした後に3つ目の寒波が来る前の好天で下山してしまうことが得策と考える。

2つ目は、軽量化である。この山域については、もれなくドカ雪が来ると考えて良い。つまり胸以上のラッセルを強いられることになるだろう。今回は、BCからのアタックということで馬鹿のような量の食料を持って行ったが適切な量を持って、必ず予定日までに最終キャンプに入るスピードを求めた方が良いと感じる。

3つ目は、濡れに対しての意識である。やはり北陸は長野と比較しても暖かく、また、標高も出発時は1000mを下回る。よって、雨も降りやすく初日からずぶ濡れになる可能性がある。また、日本海の湿気をたっぷりと吸った湿雪はラッセル時にハードシェルを濡らすことになるだろう。カップを持っていくなり対策はした方が良い。

まだまだ反省点はあるが次に繋げるという点で以上を挙げておく。

私が撤退の判断をしたのは装備の面ももちろんあるが、2650mの雪壁を登り切り見上げた時、生死の境を見た気がしたからだ。どす黒い雲と唸りをあげる風の音、非常に怖さを覚えた。昔の人間が劔岳を魔の山と恐れた理由がよくわかる。馬場島からの林道で振り返った。劔岳は晴れていた。月並みな言い方だが、明らかに私たちを嘲笑っていた。

坂井陽樹（会3）

冬合宿を振り返って、この合宿からは多く

のことを学ぶことができたと思う。まず入山地域が富山県ということで、僕らがよく登る槍・穂高の山域とは全く異なる雪質、気象であった。雪は湿雪で、かつ大量だった。今までにしたことのないくらいのラッセルを強いられた。テント生活でも湿雪で濡れることが多かった。そのせいで空焚きをして白ガスを使いすぎてしまった。また純粹に悪場の通過も難しかった。なんでもないような場所でも雪のつき方が悪く、ロープを出すかとても迷った。ロープを出すと時間がかかるし、何よりも寒かった。そして多くの悪場をノーロープで越えてしまうことがあった。登頂することばかりを考えていると退路のことが疎かになり、果たして下山できるのかというような問題もあった。時間の見積もりも甘く予想以上の時間がかかってしまうこともあった。このように今までの山行とは一線を画す難しさがあった。そして実際に計画の段階から僕らに登頂することができるレベルの山だったのかということも考えさせられた。しかし、残念ながら登頂とはならなかったが、全員が凍傷にもならず無事に帰還できたことは評価に値すると思う。これからどのような山行でもこの安全ということを念頭にまた挑戦していきたい。



川地一樹（会4）

・行動の反省

劔岳アタックの日において、スノーバー1本、内藤の安環、竹田のスリングを2614mのピークに残置してしまった。これらの装備は、後発隊が2614mから懸垂したときに残置した装備である。事前に無線で残置するという連絡を僕が受け取っていたが、“2614mで残置するというのを聞き取れていなかったことが原因である。二人ともごめんな”。

今回の山行では、4年どうしであまり話し合っていなかった。夜のリーダー会で初めて顔を合わせるといったかんじ。年末年始の早月尾根という環境が非常に過酷で、自分自身にあまり余裕がなかったことが原因かなと思う。

・生活の反省

テントが埋まってしまいそうな雪、変形しそうなほどの風。今回のテント生活では、自然から与えられるストレスが多かったように思う。それ故にテント内で人から与えられるストレスの許容量がオーバーして、下級生に無駄にあたってしまった…ような気がする。仕方が無い、人間なんだから、と割り切ってしまうことも出来るが、それは僕にとってはナンセンス。イライラを他人にぶつけたところで現実は何も変化しません。親友や身内に罵詈雑言を並べられても笑顔で対処できる、半分イカれた精神を身につけたい。

・係の反省(装備)

大きな反省はふたつ。1つ目、白ガスを序盤に使いすぎた。早月小屋で雪洞を完成させるまで毎日湿雪ビチョビチョ生活が続く、空焚きをしすぎたためだと思う。具体的な

数字を述べると、1日の白ガス使用量が2Lを少しオーバーするぐらい(※山行人数は8人)。下山したときに残った白ガスの量は3Lぐらい。予備をマックス使う場合を考えると、わりとギリ。

2つ目は、劔岳アタックの日において、先発隊に装備ミスがあったこと。土嚢袋を持って行くのを忘れた。朝テントをでた後に、僕が単独で先発隊の装備を一カ所に集めたわけだが、その時点で土嚢袋を忘れていた。原因としては、朝の寝ぼけた頭で大量の装備を一人で準備したこと。まず、今回団装は、小さい半雪洞を作ってそこで管理していた。そして、アタックに必要な装備を朝取り出していたのだが、これは正直前日にできる。アタック装備メモっておく メモを見ながら団装雪洞から装備を取り出す それらをスノーフライの前室に入れておく。以上、小学生でも出来る！ 問題なのはこの作業を極寒の環境でやらなければならないこと。非常にダルいですが、アタック団装備を覚える記憶力が無い僕にとっては、これが特効薬！

竹田昴 (会4)

なんとしてでも劔岳の山頂を踏むことが必要だった。今年度末の目標として掲げた奥大日尾根から別山尾根を経て劔岳山頂を目指すルートへ挑むうえで、厳冬期の早月尾根はテストピース的位置づけだった。しかし、山頂は踏めなかった。

要因はたくさんあるが、全ては「見積もりの甘さ」、この一言に集約できる。個々人の技量、隊全体としての力量、天候判断、荷物の重量、装備、行動の時間帯、全てにおいて見積もりが甘かった、想像力が乏しかったと

言わざるを得ない。あらゆる判断を担うのがリーダーの役割だとするならば、私は間違いなくリーダー失格だった。

あえて一つ最も大きな要因を取り上げるならば、行動3日目に停滞したことだろう。強烈な寒気が来ていて、重歩荷をしていた私たちはラッセルスピードの遅さに行動中でさえも後続は震えが止まらなかった。凍傷の危険性もあった。2日目までの行動がかなりハードだったことも3日目の停滞を誘引した。5日目の天気は最も良い予報で、4日目に早月小屋、5日目にアタックが合理的と思われた。戦略停滞と位置付けたその停滞が、あだとなった。4日目の天気がすこぶるよく、この日を使えばたとえ夜に食い込んでも、月明かりのみで行動できるほどの天気だったその日は、いやその日しかチャンスはなかった。5日目の予報は午前中には崩れ始め、先発隊はからがらの敗退を強いられた。先発隊はよく頑張ったと思う。3日目に動くメンタリティと体力、変わりやすい天気の中で、「できるだけ進む」ことを選択する意思、全てが欠けていた。

これらの話は結果論でしかない。総合判断としては妥当だったと思うし、全く同じ状況なら今でも同じ判断をすると思う。でも、山頂を踏めなかったという結果はこれ以上ないほどに明確な事実だ。

細かい反省点を上げるときりがないので、それらは他のメンバーの反省に期待するとして、ここでは僕の奥大日尾根から劔岳を目指すことに執着した思いの丈を話す。

信州大学山岳会という団体に所属していることがとても誇らしかったし、とても好きだった。メンバー全員の意識レベルがここまで高められた団体は他に類を見ないと思

う。他大学の山岳部を見ると、やはりとても強く、エネルギーにあふれているメンバーはいるにしても、部の全構成員が高いモチベーションを維持している様子はなかなか伺えない。その温度差に悩むメンバーが多いことと思う。その点、信大山岳会は、いわゆる「全体力」のようなものを半強制的に求められる環境で、個々人のやりたい程度が尊重される昨今の時代の風潮に反して、全体主義的空氣が流れていた。僕は、その空氣が気に入っていた。

個人で派手な登攀をやったのけるのは華々しい感がある。アルパインスタイルが主流ないま、大人数でのそのそと行動する登山はあまり目立たない。しかし、一つの団体が全体として何かを成し遂げる記録には力強さがある。個人でやる登攀とは一線を画す迫力というかエネルギーがあると思う。そのエネルギーを僕は、特に信大山岳会の過去の記録から大いに感じていた。1970年代の記録などは心震わせられるものばかりだった。今記録で読んで感じるこのエネルギーを、現場で、自分自身で感じたかった。信大山岳会なら、ここでなら、それができると信じた。リーダーに就任した今年度のはじめに、あえて全体主義的な山岳会を目指し、その証として奥大日尾根から劔岳を目指す計画を立てたのである。

早月尾根が敗退に終わり、なんとなく燃え尽きた感がメンバーの中に流れているのが分かった。奥大日を目指すか否かみんなで話し合ったとき、目指すと手を挙げた者は僕一人しかいなかった。

僕には、現実が見えていなかったのかもしれない。僕のエゴをみんなに強制し続けた一年だったのかもしれない。そう思ったと

きに、リーダーとしての人格を持ち合わせていない自分に出会ってしまって、泣いた。それでも、強制感や押し付けを感じながらも、ここまでついてきてくれたみんなのことを思うと、もっと悔しかった。申し訳なかった。「奥大日には行けません」といった後輩たちの言葉が切なかった。けど、それが真実だった。

つらつらと寒い文章を書き起こしてしまった。失敬。

さて、早月尾根は敗退したが、みんな生きている。劔岳山頂を踏めなかった結果と同じだけ明確な事実だ。山登りで一番かっこいいのは、山頂に立つ人ではなく、生きて帰ってくる人だと思う。そのあまりにも稚拙な登攀内容に嘆き、当時の弱気なメンタリティを回顧しては落ち込み、山頂に未練を残し、文字通り心も体もボロボロになりながら、それでも生きて帰ってくることが一番大事なんだと思う。行ってきますを言った者にはただいまを言う責任があることを忘れてはいけないと思う。そうやって、また山に行こう。

来年度以降の後輩たちの無事と活躍を祈って。



10月

真川鍋倉谷

日程) 2021年10月11日
メンバー) 竹田CL(会4)／和田(会1)

0550 杉野大橋 P
0605 ヒコサの滝展望台
0640 入渓点
0740 サクラ谷出合
1445 天狗の庭
～大休止～
1530 発
1540 高谷池ヒュッテ
1730 笹ヶ峰キャンプ場
1820 杉野大橋 P

頸城山塊の沢はゲシャゲシャしている。岩はポロポロ、ペナペナドロドロした草付き、歩きはヌメリがちで、快適とは程遠い。その中でも鍋倉谷は比較的快適らしく、人もそれなりに入っている。

ヒコサの滝展望台からピンクテープを忠実に最後まで辿っていくと惣兵衛落谷出合よりも上流に出る。単調な河原を遡行し、サクラ谷との出合に至る。ここは鍋倉谷へは一段上がって遡行することになる。鍋倉谷に入ってすぐにゴルジュ帯になりチョックストンの挟まった5-6m程の滝が現れるが、水線突破は厳しいと思う。左岸のスラブをポロい水平クラック目指して直登し、クラック沿いに落ち口奥へ。どうせ大したプロテクションなど取れないだろうと思ってトライカム1セットとハーケン3枚しか持ってこなかった。クラックはテストイングす

ると小石を吐き出しながら崩壊するほどポロいので結構神経を使った。登り切って、1年生の和田と2人きりというシチュエーションにやってしまったと思った。これは絶対に墮ちたり怪我したりすることは許されない。しかしゴルジュ内は敗退も厳しく、すぐそこに見えている核心の滝さえ越えれば終わりだ…そう踏んで、行くことにする。7-8mほどのスラブ壁をノープロテクションでジワジワ登り、技術的核は越えた。墮ちても死にはしないだろうが、怪我の一つや二つは負うかも知れない。初心者はクライミングシューズがあると安心だろう。和田も沢靴でノーテンで登ってきてくれた。その後も冗長な河原歩きが続くが、いくつか小規模なボルダーを越えるところなどはお助け紐を出しながら進んだ。

第3ゴルジュに入り、ロープを1ピッチ出し大滝基部へ。ここも岩が脆くプアプロテクションで、何とか終了点を構築した。大滝は上部は快適そうだが、下部が見るからにコケコケのヌメヌメでさらに全身濡らさないと取り付くのは厳しそうだったので、左岸から巻く。この巻も泥藪なのだが、そこそこ傾斜があり、特に下部はまともな灌木もなくプロテクションが取れない。比較的丈夫そうな樹木が出てきて急な木登りを終え、大きい木で終了点。それから少しトラバースするためにロープを伸ばし、木に捨てスリを巻いて50mロープ1本で懸垂し大滝の落ち口に降り立った。

当初の予定では天狗の庭にトップアウトした後一般道から火打山山頂を目指すことになっていたが、時間的に厳しいと感じたのでそのまま沢筋を火打山直下まで進み山頂を目指すイメージで上がる。しかしこち

らはこちらで藪がすごく思ったよりも時間がかかりそうになったのでトラバースして天狗の庭を目指し、山頂は諦める決定をする。トラバースは裕に 2m を超える笹藪で 1 時間強猛烈な藪漕ぎをしてなんとか天狗の庭へ。屈強な和田も流石に身に堪えていた様子だった。天狗の庭は湿原で保護エリアとなっており、嚮蹙を買うが、気にせずメスティンで肉まんを蒸し、しばしピクニックタイム。下山は一般道を早足で駆け降り、長い林道歩きをこなして駐車場へ。充実した 1 日となった。

最初のゴルジュ入口に出てきた壁を見て、引き返す選択肢を自分の中に持ち合わせていなかったことは大いに問題があったと思いき反省するところである。落ちなかったから結果的には問題なし、ではあるが、一方でマージンが極端に少なかったのも事実で、これは山岳会で山をやっている以上問題視すべき事項だと思う。今回はメンバーが直前に次々に減ったわけだが、その変動に伴い丁寧に再承認を求める作業を怠ったことが大元の問題であるように思う。

反省点の多い山行ではあったが、ともあれ充実したことに違いない。今まで行った沢の中でも数段難しいと感じたが、ステップアップとしてはとても良かったし、和田も沢登りの楽しさ、不快感、自由さをしっかり感じとってくれたと思う。沢登りは僕の知らない山の顔をたくさん見せてくれる。これが堪らなく楽しいのである。



荒船山

日程 2021/10/16

メンバー

会 1 加藤・和田

会 2 内藤

行動記録

10/16

7:40 内山峠登山口

8:20 一杯水

8:45 鱸岩

9:35 経塚山

10:10 鱸岩

10:35 一杯水

11:15 内山峠登山口

本山行は、年度末に行われる奥大日尾根および別山尾根から剣岳を目指す山行に向

けて、一年生と2年生で別山尾根の夏道を歩いておこうという意図で企画された別山尾根山行が、積雪のため中止となり、代案である本山行を行った。

荒船山はその見た目から、僕の他上級生が登ってみたいということで選んだが、まさかのその2人が直前に退会するというところで、あまりモチベーションの上がない入山だった。

内山峠登山口には、車が数台止めれる場所と、公衆トイレが設置されていた。登山道の序盤はよく整備されており、ときおりでてくる崖には柵が設置されており危険箇所はない。後半になると、急登になってくるが危険箇所には鎖が設置されており問題ないだろう。岩質が濡れると滑りやすく、下りでは注意されたい。鱸岩以降は、ただの平地歩きで面白みがなかった。経塚山直下で少し登るが、ほとんど平らである。

妙義山表妙義白雲山コース

日程：2021/10/17

メンバー

会1 加藤・和田

会2 内藤

行動記録

10/17

6:40 妙義神社

7:30 大の字

7:50 辻

8:05 奥の院

8:45 ビビリ岩

9:05 背びれ岩

9:20 大のぞき

10:00 天狗岩

10:20 タルワキ沢のコル

10:35 相馬岳

11:00 相馬岳発

11:10 タルワキ沢のコル

11:30 タルワキ沢の出合

12:10 妙義神社

荒船山に登った次の日は、荒船山からほど近い妙義山へ行くことになり入山した。天気は雨であったが、怖かったら撤退する時間猶予もあるので行くことにした。本ルートは鎖がなければすべてバリエーションルートぐらいの難易度になるであろう。妙義神社の本殿と思われる建物を妙義神社にむかって右側のほうへいくと入山口がある。ピンクテープは比較的充実しておりルートファインディングは容易である。大の字までは、やや寝た岩場を鎖つたいに登っていくと、大の字の岩峰があるのでそこを登ると大変良い見晴らしがある。岩が濡れていたため慎重に登った。ホールドはたくさんあるのでホールドを選ばずべらない。奥の院はかなり立っている鎖場である。ここが怖いような岩のコンディションであったら引き返すほうが無難であるように思う。ビビリ岩は露出感がある。かなり怖いを着実に登れば問題ないであろう。背びれ岩も同様に露出感のあるリッジである。天狗岩以とタルワキ沢のコルとの間に、30m程度のかかり長い鎖場がある。タルワキ沢のコル以降相馬岳までに危険箇所はない。タルワキ沢の登山道は、相馬岳に登る登山道で1番登りやすいとされているが鎖場がでてくる。上部からの落石にも十分注意されたい。タルワキ沢の出合いから妙義神社まで

の登山道に悪場はない。

瑞牆山マルチ継続

日程：10/16

メンバー：原田(5)・大島(3)・河内(3/L)

行動記録：6:00 駐車場発 8:20(joyful moment) 取付 10:10TO 11:10(錦秋カナトコ)取付 15:05TO 16:50 取付 18:00 駐車場

・ Joyful moment

特別難しいルートではないがハンドもワイドもあり充実感のある内容。瑞牆山マルチの初陣には持って来い。燕ハングからは白いテープをたどると良い。下降は歩いて降りることができる。

・ 錦秋カナトコルート

こちらのルートは 5.10a の内容になり確かに一段階レベルが上がるように感じる。核心部は河内がリード。オンサイトしました。最高。残りはそこまで難しくない。ただ最後のスラブは緊張。こちらの下降はカナトコ岩から大面岩方向に左へ下りるとまた、ボルトの懸垂点がある。そこからはとにかく真っ直ぐに3P ほど下りると取り付きに戻る。

全ピッチチームオンサイト。瑞牆はいい山だ。駐車場で山野井泰史にも会った。



八峰キレット偵察山行

日程) 2021年10月16-17日

メンバー) 川地、竹田 CL(会4) / 坂井(会3)

10月16日

0910 大谷原 P 発

1010 西俣出合登山口

1200 高千穂平

1320 冷池山荘 T.S.

17日

0405 T.S. 発

0520 鹿島槍ヶ岳南峰

0535 撤退開始

0540 鹿島槍ヶ岳南峰

0630 冷池山荘

0730 高千穂平

0830 西俣出合登山口

0940 大谷原 P

初日は天気が良く剣がバッチリ見えて気分は最高。いよいよ後立山全山縦走の核心部の偵察！と行きたかったが、今年度1番乗りの大寒波に捕まり、岩は凍てつき風はビュービュー、夏装備の我々には太刀打ちできず、鹿島槍北峰に向かう悪場で退散。偵察叶わず、しかし冬の接近に心躍らせた山行だったとき。

八ヶ岳

メンバー

会1 加藤 (CL)、和田

1日目 10/23(土)

6:00 駐車場発

8:15 編笠山

8:45 青年小屋

9:50 権現岳

11:10 キレット小屋

13:05 赤岳

14:30 行者小屋

前日に山小屋に連絡を取ったところ、雪が少し降ったということを知った。そのため、行けるところまで行こうということを決め登山を開始した。編笠山を登っている途中で雪が出始めた。しかし、雪の量が非常に少なかったため、もう少し進んでみようということになり、赤岳まで足を進めた。その後、赤岳からの下山で予想以上の雪がありこれ以上進むのは危険と判断し、撤退を決めた。赤岳の後、横岳、硫黄岳と進む予定だったが、計画していた工程をすべて通せず残念であった。

2日目 10/24(日)

5:00 起床

6:15 行者小屋発

7:30 美濃戸登山口

2日目はSケープを使い、行者小屋から下山した。会1だけで行く初めての山行だったが、進むか撤退かの判断は難しいと感じた。この判断を正確に行えるよう経験を積んで

餓鬼岳

期間

2021.10.23

メンバー

坂井 (3) CL

記録

6:40 白沢登山口駐車場

8:00 大休止 1.5h

11:30 最終水場

12:40 大風山

14:10 最終水場

15:40 白沢登山口駐車場

所感

餓鬼岳ね。オーケー。常念山脈の北端に位置する山。燕や常念のように好アクセスながら標高が低いので不人気なだけの山だろう。と思って入山すると痛い目にあう。登山道は崩壊していて、橋などの人工物の半分くらいは壊れている。人の気配もないので何かあった時が不安だ。またすぐ横に白沢という沢が流れているので雨天時の通行は無理だと考えた方がよい。そのことを承知の上で、そのような雰囲気山の山域が好きならば入山すべき山であろう。ちなみにこの日はアイゼンを持たずに行って、雪が出てきたあたりで撤退してきた

北穂高岳

<日程>

10/23~24

<メンバー>

会3：大島

会2：内藤

<記録>

7:00 上高地 BT 発

9:30 岳沢小屋(敗退決定)

12:00 上高地 BT 着

<所感>

入山前から雪が多いことは分かっていたが、予想通りかなり雪があった印象であった。

今回は秋山装備であったため、無理せず岳沢小屋で敗退を決めた。

北穂高小屋は個人的にすごく行きたかったので、来年にリベンジと言う事で。

兎にも角にも、雪化粧した穂高が見れて冬のモチベーションが高まったので良しとしましょう。



11 月

烏帽子岩左稜線

日程：11/3

行動記録：6:30 駐車場発 7:30 取付

14:30TO 15:20 取付 16:00 駐車場

メンバー：河内・大島・坂井(3)

初の全員集合同期山行。内容は簡単な歩きがメインのクライミング。ハイライトは、途中のハンドクラックと最後のチムニー。ワイドは面白い!!



明星山 P6 南壁

左岩稜・フリースピリッツ

2021 年 11 月 13-14 日

11 月 13 日

0810 駐車場発

0900 (～準備)登攀開始

1530 下降路入口

1635 駐車場着

14 日

0510 駐車場発

0540 (～準備)登攀開始

1550 下降路入口

1630 駐車場着

アプローチは駐車場すぐのガードレールから沢方向へ伸びる踏み跡を辿る。河原に降りたら西にすぐでチロリアンを渡らせてある岩があるのでそこから岩壁基部まで。左岩稜は3ピッチ目で易しくてダイナミックなエイドクライミングを楽しめるルートだ。下部2ピッチは脆く靴に泥がついてると滑って怖い。上部4ピッチ目以降は印象があまりない。デプローチ道に合流するまでタラタラと長くて面倒。デプローチは急でドロドロで歩きづらい。

フリスピは全体を通してボロい。落石は落とすのも落とされるのも注意したい。プロテクションもボロい。各終了点はボロいなら適宜補う必要がある。なんちゃらトラバースは高度感抜群の気持ち良いピッチだ。デカイ壁の中にいることを感じられる。近さゆえにゲレンデ感が出てしまっているのが否めないが、その内容は不確定要素が多く、また大きい壁ゆえのメンタリティが必要だ。プアな支点での敗退も容易ではないだろう。自信をもってそれでいて丁寧なクライミングができないと多分楽しめないと思う。気軽に取り付く壁ではないということは覚えておこう。

でも、あれだけの壁だ。日本でもこんなに近くでビッグなスケールの中でクライミングができるのは、最高に素晴らしい。1度は体験したい壁だろう。そして世界へ…!



妙義山 木戸壁右ルンゼ ルート

・相馬岳北稜

期間

2021.11.13-11.14

メンバー

坂井 CL (3) 内藤 (2)

記録

DAY1

9:00 駐車場発

9:30 取付

11:00 松の木

12:10 TO

14:00 取付

16:00 ちょうずの頭

17:15 国民宿舎

DAY2

4:00 起床

5:00 発

5:20 取付

8:50 56 のコル

11:30 p12

13:20 相馬岳

15:20 登山口

所感

7月に行った時は、僕の脚の怪我やヒルが大量にいるわで無念の敗退を喫したわけだが、今回はそのリベンジマッチと、内藤のアルパインリードデビューということで再度計画を出した。結果はどちらの目標も果たせた。木戸壁は乾いていれば、支点も確実に、岩も硬く快適である。相馬岳北稜は、たまに壁登りの尾根バリルートという雰囲気だった。壁あり歩きありなので、イメージとしては北鎌尾根のような感じだろうか（行ったことないけど）。承認時にも2人でいくことについて検討したが、確かに有事の際はエスケープの難しいルートではあった。核心の p12 は鎖があれば特に難しいことはないが鎖がしっかりと降りてきていない場合があるので注意が必要である。その場合は#0.3 のカムに本気の A0 で越えることができる。この時期はヒルがいなくて快適だが、それゆえにヒトはうじゃうじゃいるので早い時間に取り付くことをおすすめする

12月

富士山吉田口ルート

日程：12/2

メンバー：川地(4/L)、竹田(4)、内藤(2)

天気： 晴れ

行動記録

2：50 北口本宮富士浅間神社発

4：45 馬返し

8：00 佐藤小屋

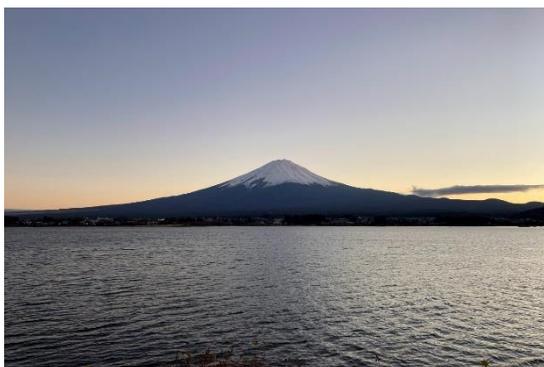
11：00 2900m付近で撤退

12：25 佐藤小屋

13：50 馬返し

15：50 神社

佐藤小屋手前あたりから登山道が凍っていたのでアイゼンをつけた。標高 2800m ぐらいで川地の体調が悪くなり始めた。ペースも露骨に遅くなり、頂上に行くのは時間的にも体力的にも厳しいだろうということで撤退した。2800～2900mでは風はそんなに強くなく、3000m以上でもおそらく上級生なら十分歩けていただろうと思う。良いコンディションの日を逃してしまったと思うと、非常に悔しいね。



八ヶ岳 西面登攀

日程) 2021年12月4-5日

メンバー) 原田(会5)／竹田(会4)／坂井(会3)

12月4日

5:50 八ヶ岳山荘駐車場発

6:40 美濃戸山荘

8:10 赤岳鉱泉 B.C.設営

9:05 発

9:30 裏同心ルンゼ F1 取付き

10:10 登攀開始

13:40 大同心稜 T.O.

14:15 小同心クラック取付き

18:20 横岳 T.O.

19:20 地藏尾根分岐

20:00 行者小屋

20:20 B.C.

5日

6:40 B.C.発

7:50 文三郎尾根上主稜取付き

8:30 登攀開始

13:45 赤岳山頂 T.O.

14:30 行者小屋

14:50 B.C.(撤収開始)

16:05 赤岳鉱泉発

17:35 八ヶ岳山荘駐車場着

裏同心ルンゼは結氷が良く、快適。坂井も無事アイスデビュー。そのまま小同心へ継続したが、登攀中ロープがスタックしたり何なりで気付けばヘッド登攀に。だんだんガスってきて大変。下降でのアクシデントを考慮し、登り切って確実に分かる登山

道を利用し無事ベースへ帰幕。久々に悲壮感あってちょっぴり楽しかったり。反省。2日目はフリーソロの馬目さんと合流して赤岳主稜へ。坂井の冬期登攀デビュー。晴れて気持ちの良い一日になった。



八方尾根

日程：2021/12/4-2021/12/5

メンバー

会1 加藤・和田

会2 内藤

会3 大島・河内

会4 川地

行動記録

12/4

11:55 黒菱林道冬季ゲート

14:40 1550 m 付近尾根幕営

12/5

5:00 起床

6:10 幕営地発

6:45 黒菱平

7:15 撤退決定

9:45 黒菱平発

10:00 幕営地着

11:40 幕営地発

12:50 黒菱林道冬季ゲート

1日目

八方尾根スキー場の入山口へ続く最後のリフト、グラートクワッドリフトは、環境省の職員が視察に来て積雪が十分で環境に負荷を与えないことを確認しないと営業できないようである。その間八方尾根スキー場はグラートクワッドリフトを動かせず、ゲレンデを歩くのもやめていただきたいとのことで入山できないということがわかった。係員に見つかったら入山できない可能性があるため、闇夜に紛れて入山することにした。圧雪車との接触事故には十分注意が必要である。圧雪車が動いているようだったら、明るくなるまで行動しないつもりであった。3:30にボックスに集合したが、出発時車のバッテリーがあがっていたためエンジンがかからないことがわかった。JAFを呼んで対応したが、八方尾根の駐車場にこのまま一晩置いたらまたバッテリーが上がってしまう可能性があるとのことで、バッテリーを購入してから入山することになった。そのため入山時刻が12時近くとなった。

黒菱林道をひたすら歩き、林道に面しているまだオープンしていないゲレンデのリフト下をひたすら登っていきアルペンクワ

ッドリフトの乗り場近くにて。このゲレンデは未整地であったが、雪崩れるような積雪状況ではなかった。積雪状況によっては注意が必要かもしれない。その後尾根上を行き、尾根に乗ってすぐの 1550 m 付近で幕営した。

2 日目

夜にかなりの積雪があったようであったため雪崩に注意してすすむことにした。アタック装備で幕営地を出発して 1 ピッチかからずに黒菱平に着いた。黒菱平から再び尾根に乗るところで樹林も少なくなっており雪崩そうな斜面であったため、弱層テストを実施した。弱層テストはコンプレッションテストを実施した。手首から数回叩くだけでせん断しなかったが雪柱に亀裂が入った。しかし肘から叩くと上層から 10 cm と 75 cm 付近でせん断した。コンプレッションテストは 3 回行ったが同様の結果となった。6 人という人数を考慮して撤退を決定した。その後黒菱平で雪洞をほったり、イグルーを作ったりした。幕営地に戻り、一部の上級生は土のう懸垂、全員でクロスサーチを行った。往路に戻り、黒菱林道ゲートまで戻った。

入山前からさまざまな困難に襲われた山行であった。無理やり充実させたがそれでも不完全燃焼であった。



ジョウゴ沢アイスクライミング

日程) 2021 年 12 月 8 日

メンバー) 虎之介(学士)／竹田 CL(会 4)／大島(会 3)

0510 八ヶ岳山荘駐車場発

0550 美濃戸山荘

0750 赤岳鉱泉(休憩)

0830 赤岳鉱泉発

1025 撤退(F3 ゴルジュ内)

1105 赤岳鉱泉(休憩)

1150 赤岳鉱泉発

1240 美濃戸山荘

1320 八ヶ岳山荘駐車場着

2 日前から雪が降り続けていたようでドラッセル山行だった。F1 はジョバジョバで右側が辛うじて雪の下のグズ氷を駆け上がれる程度。F2 は絶望的な結氷のため右岸から巻く。F3 ゴルジュもほぼ結氷してなくて雪だけすごくてなんか大変だった。乙女の滝を望遠して結氷悪そうで天気も悪くて、みすみす引き返してきた。

まあたまにはこういうアクティブすぎるレストもいいものだ。山に入るだけで健康になる

八ヶ岳(中山尾根・赤岳主稜)

日程：2021.12.11~12

メンバー：

原田(5)河内(3/L)大島(3)内藤(2)

行動記録

12/11 6:20 駐車場 10:25 行者小屋

12/12 3:00 行者小屋 14:55 駐車場

現役留守の永山が何故か入山していたために救助体制が機能しておらず、登攀は止めた。行者小屋までは大丈夫だろうというリーダー会判断で入山する。特に何も無い一日。二日目は河内・原田で中山尾根、大島・内藤で赤岳主稜に行った。充実感のある内容であった。現役留守を受けたからにはそれなりの責任があることを今後受ける方は肝に銘じていただきたいと思います。



霞沢岳

期間

2021.12.11-12.12

メンバー

川地 (4)、竹田 (4)、坂井 (3) CL、加藤 (1)、和田 (1)

記録

DAY1

8:00 発

9:05 砂防事務所

11:40 JP

テント設営後 13:15 までセックン

DAY2

4:00 起床

5:05 発

7:20 岩峰

8:40 上

9:15 山頂

9:55 懸垂点

10:25 岩峰下

11:05 テン場

11:55 テン場発

13:05 砂防事務所

14:05 坂巻温泉

所感

昨年も霞沢岳西尾根に行っているのだから大体はそれとの比較となるが、今年は雪が少なかった。今年は後立山をはじめとした各所で大雪と言われているが、殊、霞沢岳においては寡雪だった。取り付きから少し登ったところまでは藪が出ていた。雪が少なく締まっている上に、トレースもあったので例年より早く JP 付近のテン場に到着した。2日目は標高が上がるほど視界は悪くなり、頂上の眺望は皆無だった。岩峰は冬合宿の練習ということで FIX 工作して通過したが特に問題はなかった。合宿でもあれくらいの場所で1年生を確保するであろう場所なのでとても良い予行練習になったと思う。

広河原沢右俣(クリスマスルンゼ/ポ

ストクリスマスルンゼ)

0600 舟山十字路 P

0650 二俣

0810 クリスマスルンゼ基部(クリスマスルンゼ登攀)

1240 ポストクリスマスルンゼ

1650 クリスマスルンゼ基部

1730 二俣

1800 舟山十字路 P

クリスマスルンゼはアプローチ 2 時間ほどと近くて練習場にとっても良い。大滝も中央やや左の弱点となる凹角を登ればさして難しくはない。あとはトップロープで好きなように登れば初心者は充実するだろう。

クリスマスルンゼ真向かいのポストクリスマスルンゼを詰めると 10m ほどの幅細めでそこそこ立っている見栄えのする滝が現れる。一見ボロそうに見えたが勇気を出してトライすると意外と結氷良く、スクリュウもそれなりに効いていたと思う。こちらもトップロープをかけて遊ぶ。180 以上の長いスリングが数本あると支点構築に困らなくて良い。

ゲレンデアイスの時は、特にトップロープで遊ぶ場合は、ドライ加工の施されたロープを使用しないと凍りついて径が 1.5 倍ほどに肥大化し、ビレイデバイスを通過しなくなってしまうという大変なアクシデントに見舞われるので注意。針金のように使い物にならないただの重たい物体と化してしまう。

次は武藤返しの滝でも遊んでみたい。



尾勝谷塩沢左俣

日程) 2021 年 12 月 22 日

メンバー) 馬目弘仁(学士山岳会)、竹田(会 4)、河内(会 3)

0430 戸台工事ゲート

0610 本谷/塩沢二俣

0820 塩沢右俣/左俣二俣

0900 F2 取付き

1520 稜線 T.O.(丹溪新道出合)

1610 南アルプス林道出合

1905 戸台工事ゲート

朝 3:00 に松本を出発して、高速を使って戸台まで。戸台の林道は崩壊のため工事が続いており、仙流荘の上流側約 1km ほどのところに工事用のゲートが設置されている。ゲート手前の路肩に駐車して出発。キレイなトンネルを抜けて少して林道が河原へ下りていく方向へ分岐しており、河原方

向へ。ずーっと河原を遡行して途中でかい堰堤を、あり得ない歩幅の階段を登って越える。僕は左岸から越えたが右岸からも越えられるようだ。この辺りは地形図に出ていない林道跡を辿っていける。途中かなり立派な石灰岩の岩壁を見ながら延々と遡行をしていき、右俣/左俣二俣を越えて少しでなかなか迫力のある F2 が現れる。ここで登攀装備に切り替えてクライミング開始。F2 は竹田リード。4,50m ロープを伸ばして無事トップアウト。弱点を突いて登ればせいぜいIV級くらいだと思う。終了点は左岸側の立木から取れる。河内がフォロー中にスクリュウを落としたみたいだが馬目さんが回収してくださった。続く F3 は F2 よりもかなり短いが傾斜は増す。ここも竹田リード。F3 以降は小粒な滝が連続して飽きない。気づいたら F2 に次ぐスケールの F10 が現れる。河内がリードを懇願し、見た目傾斜も緩いので、GO サインを出す。丁寧に時間をかけて無事トップアウト。ナイスリードでした。F10 でほぼ終わりかと思えば、稜線近くまで小粒な滝が連続する。一ヶ所数 m 垂直な滝が出てきて、馬目さんが先行し、長スリングを連結して竹田と河内の荷物を引き上げ、その後フリーで2人とも抜けた。河内はここが一番怖かったようで足が切れた時には僕もヒヤッとした。怖い時は確保して欲しいと言う勇気も必要だろう。

滝が無くなってくるとあとは藪漕ぎラッセルを1時間弱こなして稜線へ。3人でがっちり握手をしてトレースのついた丹溪新道を爆速で下る。ピンクテープが豊富にあるが、トレースが無かったり暗かったりすると迷いやすいようだ。日が暮れるよりもず

っと前に余裕をもって林道に下り立ち、ひたすら長い南アルプス林道をお喋りしながら戸台まで下った。

それにしても、最高に楽しい山行だった。やはりアイスやるなら上まで抜けるアルパインアイスが好きだ。こんなに充足感と興奮に満たされた山行は久しぶりで、やっぱり僕は山が好きだと思った。

馬目さん、お付き合いいただきありがとうございました。



1 月

宝剣岳極楽尾根

日程：1/8~10

メンバー 原田(5)、竹田(4)、河内(3/L)

初日:

駐車場～上松尾根～玉ノ窪小屋 BC 長い長い尾根だった。特別展望がある訳でもなく、やたらずぼるし、荷物はそこそこあるしでひたすらに遠く感じた。

2 日目:

沈殿極風かつ低音かつ極楽尾根が西面ということもあり、次の日に望みをかけて沈殿。そうやすやすと極楽に辿り着いては、ありがたみが減るというものだ。

3 日目:玉ノ窪小屋～宝剣山荘～極楽尾根取り付き～極楽平～宝剣岳～玉ノ窪小屋～上松尾根～駐車場

3:30 に起床し出発する。風は無い。月明かりでヘッドენはいらないくらいだ。快調に歩を進め、5:20 には取り付きへ。

取り付きまでには A 沢を下降。

下りて行き、左手に尾根の末端で崖になるところを過ぎ、左側を見上げると二股に分かれているルンゼが取り付きとなる。ルンゼをノーロープで登り二股右を少し上がったところからロープを付けた。そこから 60m いっぱいデリッジに到達。

さらに 60m 伸ばすと第一ピナクルの基部手前に着いた。さらに 60m 伸ばして第一ピナクルを巻き、コルに到達。さらにさらに 60m を 3p 伸ばして懸垂点に辿り着く。5m ほど

懸垂したら、ほどなくして核心の三角岩峰へ。三角岩峰も 60m いっぱい抜けた。

アイス部分に突き刺したり、トルキングをきめたりと非常に楽しいピッチだ。三角岩峰を登りきるとようやく太陽を拝む。あったかい。そこからはコンテで登り 13:15 ごろ極楽平にトップアウト。無風快晴温暖快適な登攀。極楽。

TO 後は宝剣をサクッと登り、ベースへ戻り撤収。下山する。帰りもまあ長い上にずぼるずぼる。

さっきが極楽なら、こっちは地獄。

現世にワカン履くことサボってアイゼンのまま行ったやつが落とされる地獄。さぼらない方がいいよ。



爺ヶ岳・白沢天狗尾根

日程：1/8~1/10

メンバー：川地(4/L)、大島(3)、坂井(3)、和田(1)、加藤(1)

行動記録

1 日目 天気：晴れ

7:40 爺ヶ岳スキー場発

12:40 白沢天狗尾根との合流地点で Fix

13:50 Fix 終了

15:00 小天狗 T.S

今山行は白沢天狗尾根の枝尾根を登りで使用した。白沢天狗尾根の末端は大町温泉郷付近にあるらしい。枝尾根はピンクテープが豊富で迷うことはないでしょう。Fixでは、雪がグズグズの雪壁であったためリードは怖かった。

2 日目 天気：曇り→晴れ

4:00 起床

5:35 出発

10:00 東尾根との JP で撤退

10:30 JP 手前の斜面で T.S.

最中雪で中々ラッセルが進まない 1 日であった。本日の行動予定では爺ヶ岳南尾根の JP まで行く予定であったが、風による視界不良と雪崩の危険を考慮して中断した。

3 日目 天気：快晴

5:00 起床

6:30 出発

8:00 爺ヶ岳本峰

8:30 爺ヶ岳南峰

9:30 南尾根 JP

11:15 柏原登山口

12:40 日向山ゲート

朝からド快晴。頂上では雲海を拝むことができた。今回の山行では 3 日かけて行程を通したが、2 日目のコンディションがもう少し良ければ 2 日で行程を通せていたと思う。白沢天狗尾根の末端から取りついたら 3 日かかると思います。



常念岳東尾根

日程 2022/1/14 - 2021/1/15

メンバー

会 1 加藤

会 2 内藤 (CL)

会 3 大島

会 4 川地

行動記録

1/14

7:35 ゲート

8:35 高瀬川線 No. 63 東尾根取り付き

10:00 1328 m ピーク

13:20 1955 m ピーク

14:15 2178 m ピーク手前 2050 m 付近幕営

1/15

5:00 起床

6:25 幕営地 発

6:35 2178 m ピーク

8:45 前常念岳

9:15 常念岳

9:30 常念岳 発

10:00 前常念岳

11:15 2178 m ピーク

11:20 幕営地 着

11:50 幕営地 発

12:20 1955 m ピーク
13:10 1328 m ピーク
13:45 高瀬川線 No.63
14:30 ゲート

1 日目

天候が悪いが、樹林帯であるので問題はなかった。ほりで一ゆ付近のゲートの前に駐車スペースがある。林道を道なりに進むと高瀬川線 No.63 という看板が示す送電鉄塔の巡視路があるのでその巡視路を鉄塔まで進み尾根に取り付くとよい。尾根は踏み跡が明瞭についており、さながら夏道のようなのである。尾根に雪が少ない早い時期は、鉄塔を過ぎてから少し藪こぎがある。雪が少ない場合は、大天原付近から北側に伸びる登山道を用いて尾根にとりつくともよいと思われる。今回は、鉄塔巡視路から尾根に取り付いた。ひたすら尾根を忠実にたどる。危険箇所等は特にない。この時期はトレースが明瞭でよく固まっておりラッセルはなかった。トレースを踏み外すと若干沈むが問題ない程度であった。この時期、この積雪量では笹藪に苦しめられることはなかった。

2 日目

天気は快晴でよい天気であった。アタック装備で常念岳をピストンした。出てくる岩峰は基本的に北側を巻く。ルートファインディングが必要である。今回はロープを出すことはなかったが、1年生は特にアイゼンワークに注意が必要があると思われる。赤旗は必要である。天気、視界がよければ気持ちの良い登りである。往路をそのまま注意して下山する。幕営地に戻り装備を撤収して下山した。1月になると人が多く入り、また常念岳は積雪が比較的小さいため他の山行と比較し、軽めの山行になりやす

いと思う。条件次第では日帰りも可能であると思う。



北八ヶ岳 北横岳

日程) 2022 年 1 月 14 日

メンバー) 竹田 CL(会 4)、村本和音(部外)

高校山岳部時代の後輩の雪山デビューにご一緒させていただきました。ロープウェイで坪庭まで行って、北横岳をピストンして帰ってきました。坪庭はなんだか荒涼としていてユニークな景観でした。後輩も楽しそうにしてくれて、僕も嬉しい限りです。冬の山はどこだって気持ちが良いものですね。

妙高山外輪山縦走

日程) 2022 年 1 月 15-16 日

メンバー) 竹田 CL(会 4)／河内(会 3)／和田(会 1)

1 月 15 日

0835 関温泉スキー場第 2 駐車場発

1605 神奈山

1630 T.S.

16日
0425 T.S.発
0605 大倉山
0620 大倉乗越
0725 三田原山
0935 赤倉山
1250 池の平スキー場

冬の妙高。なんとも重たい響きだ。そんな重たい雪に溺れに行くラッセル山行を企画しました。記録は無し、妙高主峰に登らずただその周りをぐるっとするだけだが、地形図上ではなかなかのナイフリッジが楽しめそう。

初日はやはりずっとラッセルで疲れた。雪崩斜面ではロープを積極的に出した。なんとか神奈山を越えられた。

翌日、リミットを決めて行動続行。期待通り雪がしまつてサクサク進める。朝焼けでピンク色に染まっていく世界が気持ち良い。

妙高はデカくてカッコいい。雰囲気は最高。赤倉山周辺は拍子抜けするほど簡単だったが、一箇所懸垂した。一年生は踏み締められたトレースを歩くよう指示すればナイフリッジでもロープレスで通過できるだろう。

下りのリフトは乗れないと断られたので、ワカンで圧雪されたスキー場をトボトボ歩く。スキーヤー下りるのはええなあなんて羨望の視線を投げ続け、気付いたときには僕らも下りていた。

なお交通のお話のだが、池の平温泉スキー場から関温泉スキー場第2駐車場は高原タクシーを利用して6,400円。2台で行ってデポするのとどちらが安いかは要検討。



七倉岳南尾根

日程) 2022年1月18-20日

メンバー) 竹田(会4)、徳杵達也(部外)、後藤希介(部外)

行動記録)

1月18日

0500 葛温泉ゲート路肩P発

0630 高瀬ダム下取付き

1555 P1888m 手前 T.S.

19日

0725 T.S.発

0735 P1888m

1500 天狗の庭

1530 船窪小屋

1600 七倉岳山頂

1610 船窪小屋 T.S.

20日

0715 T.S.発

0830 天狗の庭

1230 七倉尾根登山口

1305 葛温泉ゲートP着

来年度黒部横断を計画してるメンバーでの初山行。以前から地形図で気になっていた

尾根だったが、藪漕ぎと急雪壁の登高が主たる内容で岩要素は比較的少ない。ルーフアイや樹林帯でも発達する雪庇などの処理が肝となる。登り自体は難しくはないが、かと言って易しいわけでもないので、初心者同士の入山は控えるべきだ。

僕らは結局一度もロープを出さなかったが、出すとしてもプロテクションはスリング類のみで十分。ボリュームのある尾根登高が楽しめる。天気良ければ、振り返った先に槍が見えると思う。

帰りは七倉尾根から。危険箇所は特にないが、雪が多いとテープが埋まって、道がわからなくなるので注意。



2021 年度

城ヶ崎海岸グラウンドフォール事故

報告書

文責：河内皓亮

はじめに

この度、城ヶ崎海岸ファミリークラックエリアにてグラウンドフォールという重大な事故を起してしまった。今後、このような事故を起こさないため、また、起こさせないために報告書を作成し後世に伝える。

事故概要

事故発生日時：令和3年2月16日(火)13:55分頃

事故発生現場：静岡県伊東市城ヶ崎海岸ファミリークラックエリア

事故発生ルート：マザークラック(5.10c)

メンバー：会3 河内皓亮(クライマー/事故者)・会4 竹田昴(ビレイヤー)

事故現場状況

- ・天気快晴。気温7度程度。風3m/s。
- ・落下地点は海岸特有の削られた30cm～50cm程度の岩が多数あり、土の地面はない
- ・岩は安山岩質溶岩が分布。岩は硬いが上部は少し脆い

事故状況

・当ルートはクラックメインのルートにあたり、支点は全てカムまたはナッツを使用することになる。核心部分は上部にあたり支点はクラックを用いるものの、登る壁は

フェイス的な登りを要求させるものである。

・使用カムについては写真2のとおりである。右から順に設置していった。

・下部のクラックセクションについては問題無くリードを行い、下からキャメロット#0.4、#0.75、#0.4と順調に設置していった。ここから胎内と呼ばれる体がすっぽりと入ってしまうフレックにてレストしつつ、キャメロット#1を設置する。ここで設置する際にルートの特性上どうしてもロープの流れが悪くなってしまうために60cmスリングを用いてロープの流れを配慮する支点を構築した。(写真1参照)

・胎内から出て3m程上部に核心部分がある。そこに取り付く前に指の入らない右上するクラックがあるためにキャメロット#0.3、#0.2の順で15cmの間隔で設置を行う。私の考えでは、ミニサイズのカムのために落下衝撃が加わると抜ける恐れがあると判断し、2本のカムにて固め取るという設置の仕方であった。(写真1参照)

・最終支点から1mもいかない程度ロープを出し、核心部分へ取り付く。右手をサイドカチ、左肩をちょっとした凹角部分に入れ、左手でホールドを探していた。左足は右手とほぼ同じ高さのハイステップにて核心部分を乗り上げるムーブであった。しかし、足が抜けフォール。そのまま固め取っていたキャメロット#0.2、#0.3が順に抜けそのままグラウンドフォールした。

・落下距離は12m程。右側面からほぼ全身同時に接地した。

・外傷は、落下時に右手が保持していた岩によるものと予想される裂傷が見られた。内傷は、打ちつけたときによるものと予想される踵の打ち身と右手親指付け根の打ち

身が見られた。外傷についてはその場で水による洗浄を行い、後にガーゼで保護した。また、痛みが強かったためロキソニン1錠を17日0時頃服用した。



○：支点の位置 ○：落下点

事故後の行動

打ちつけたことによる痛みがあったために数分、悶え苦しむ。痛みが引いてきたため数m離れた所にて河内は休む。河内が冷静になってきたころに竹田は支点回収のためふみ跡をたどり、ルート上部から木を支点に懸垂でカム等の回収を行う。支点回収同時に河内は現場の保存のためルート、設置したカム、外傷状況等を記録に残す作業を行う。竹田が回収を完了したのち、帰るために片付けをしつつ行動食などを食べ、河内の様子を見る。意識もはっきりし痛みも歩けない程度ではなかったために15:35頃下山開始、15:55頃下山を完了した。事故後1ヶ月ほど脇腹周辺に軽い痛みが残るため外科医院に行くと右あばら骨が1本折れているとのことだった。繋がりが始めているので特に処置はしなかった。

事故原因

- ・カムの設置技術の未熟さ
- ・支点間隔が広いこと
- ・岩質が比較的カムが外れやすく、また、海による塩が岩についていた可能性があること
- ・ルート自体、過去に事故(死亡2件・重症1件)があったにもかかわらず取り付いたこと
- ・振られて落ちたためにカムが歩いたこと

以上の要因が考えられる。

反省と対策

① 支点設置について

キャメロット #0.2 と #0.3 の設置について、設置が甘いものであったと反省する。具体的に挙げるとまず、核心部へ突入する前の最終支点の位置が低かったために落下時に強い衝撃が加わり外れたことが考えられる。#0.2 は特に耐荷重が 6kN と比較的落下を想定しているとは言い難い。そのために核心部すぐ手前に #0.2 を設置するか、もう一つ支点を設置し、最終支点にかかる落下荷重を最低限に減らす対策が必要と考える。

CAMALOT Z4	Size	Weight	Width Range Min./Max.	Operational Range	Holding Force	Passive Strength
	#					
	0	44 g (1.6 oz)	7.5 - 11.8 mm (0.30 - 0.46 in)	7.9 - 9.7 mm (0.31 - 0.38 in)	5 kN (1,124 lbf)	0 kN (0 lbf)
	.1	45 g (1.6 oz)	8.8 - 13.8 mm (0.35 - 0.54 in)	9.3 - 11.3 mm (0.37 - 0.44 in)	6 kN (1,349 lbf)	8 kN (1,798 lbf)
	.2	48 g (1.7 oz)	10.4 - 16.3 mm (0.40 - 0.64 in)	11 - 13.4 mm (0.43 - 0.53 in)	8 kN (1,798 lbf)	9 kN (2,023 lbf)
	.3	55 g (1.9 oz)	12.4 - 22.6 mm (0.49 - 0.89 in)	13.4 - 20.1 mm (0.52 - 0.79 in)	9 kN (2,023 lbf)	10 kN (2,248 lbf)
	.4	61 g (2.2 oz)	15.3 - 27.7 mm (0.60 - 1.09 in)	16.5 - 24.6 mm (0.65 - 0.97 in)	10 kN (2,248 lbf)	10 kN (2,248 lbf)
	.5	78 g (2.8 oz)	18.8 - 33.9 mm (0.74 - 1.33 in)	20.3 - 30.1 mm (0.80 - 1.19 in)	10 kN (2,248 lbf)	10 kN (2,248 lbf)
	.75	93 g (3.3 oz)	23.1 - 42.1 mm (0.91 - 1.66 in)	25 - 37.4 mm (0.98 - 1.47 in)	10 kN (2,248 lbf)	10 kN (2,248 lbf)

② ウォーキングについて

ルート斜め上から振られるように落ちたために最終支点に重力方向とは別に横方向に強い力がかかり、テコの力で奥へ入り込むようにウォーキングしたことが考えられる。奥に入り込んだ場合に僅かなクラックの広がりによりカムが外れた。また、可能性としてルート上に塩が付着し摩擦抵抗を小さくしていたこともあり得ると考える(④城ヶ崎海岸という地形について)。対策として振られると予想される箇所は振られる方向へカムを設置することが有効であろう。今回の場合は固め取りのため最終支点を振られる方向へ、2 番目の支点を重力方向へ設置することが対策として考えられる。

③ ルートについて

フリークライミングという特性上、ルートの下調べをあまり行っていなかったがルート・エリアの事故については事前に調べるべきと反省する。特に今回取り付いたルートは過去 2 回の死亡事故、1 回の重症事故が発生している大変危険なルートであった。改訂版の日本 100 岩場には R や X といった表記はされてはいなかったがネットで簡単に検索すると直ぐに出てくる。対策として「日本フリークライミング協会」が事故や支点について Facebook にて情報を掲載しているためルート名と合わせて検索することを勧める。

④ 城ヶ崎海岸という地形について

城ヶ崎海岸というエリアについて理解がもう一つ足りなかったことを反省する。というのも城ヶ崎海岸は過去にいくつもの事故が生じているからだ。城ヶ崎海岸特有の原因として、まず、海岸に位置するために塩が

ルート上に付着していることが考えられる。塩という細かい粒子がカムを滑らせるからだ。また、下地が海岸特有の岩であるということも考えられる。グラウンドフォールした場合、土と比べて衝撃吸収が小さく体への負荷が大きいからだ。対策として今後、フリークライミングに行く場合、そのエリアについて地質や場所を下調べし行くべきである。特に海岸は一般的なエリアとは異なりボルトの腐食や潮の満ち引きにより取り付くことが不可能な時間帯もあるためによく調べることが安全に繋がる。

事故者のことば

(河内皓亮/事故者)

落ちるまで自分は事故を起こさないし山では死なないだろうという根拠の無い自信がどこかにあった。しかし、事故は起きた。限界まで粘り落ちたあと、そのまま地面へ自由落下していた。怖い・死ぬと感じる暇もなく体中に衝撃が走っていた。「止まらない」その感触は今でもはっきりと覚えている。落ちたあとは、特別寒いわけでもないがしばらくは体の震えが止まらなかった。しかしながら、意外にも頭は冷静であり事故後の対応として何を記録すればよいのか、どのように処理を行えばよいのか落ち着いて考えていた記憶がある。頭は冷静であり、体は怖がっていたのだろう。これらが生じた要因は何であろう。一つの理由として日頃、特に危急時訓練を行い、事故への対応を予習していたことと考える。皮肉なことではあるが、事故対応の大切さについて事故を起して何のために学び・考え・訓練を行っているのか身をもって学んだのだ。これを読む人にはもう一度、事故にあった時の対応

をシミュレートしてみたい。山で活動しているときにはここで滑落したら、どういった対応ができるのか頭の中でイメージしてみたい。その日頃のイメージトレーニングがいざという時に役に立つと私は思う。また、今回事故を起こしたことで支点、特にリムーバブルプロテクションについて深く理解することができた。一つ、声を大に言いたいことは基本的なことではあるが、よく岩を観察して欲しいということだ。クラックは平行だろうか、浮石はないだろうかといった事故要因となる原因を登攀前、登攀中によく観察しできるだけ排除すべきだ。

最後に今回、事故を起こし、ご迷惑・ご心配をおかけした全ての皆様に謝罪申し上げます。今、生かされていることに感謝し、事故について反省し、さらなる技術向上に邁進してまいります。

(竹田昴/ビレイヤー)

ビレイをしている手に伝わるはずのテンションの衝撃を感じることなく、上から落ちてくる後輩をなす術なく目で追うことしかできないこの感覚は、初めてではなかった。赤石沢奥壁での事故のことが明瞭にかつ自然に思い出された。

果たして、私のビレイに問題があったのだろうか、と考えたりもした。かなりロープを流せばマイクロカムに対する衝撃を最小現に抑えられたかもしれない。しかし、その選択は自分のビレイ技術やルート長に照らしてもリスクが大きすぎる。

参考までに私がやったことは、上の方で立ち往生して今にも落ちそうな彼を見て、落下距離を最小限にすべくクライマーにテン

ションがかからない程度に弛みを除いたことと、吹っ飛ばされないように壁際に寄ったことくらいで、当然にいつものビレイと同じような対処である。

問題があったのは、登攀直前に僕の同ルート of オンサイトトライを見た彼が、僕が怖そうに登ってたのを見てトライを辞めようかと判断を渋っていた時に、「せっかくだしやればいいじゃない」と焚き付けたことだろう。彼が 5.10c のクラックを以前にオンサイトしたということも知っており、トライを勧めたこと自体は悪ではないと思う。ただ、これではまるで赤石沢奥壁での事故ではないか。

最後に、今回の事故でご迷惑とご心配をおかけした SAC のみんな、家族には、申し訳ありませんでした。

参考文献

- ・最新アルパインクライミング 菊地敏之 著
- ・日本フリークライミング協会 Facebook
- ・吉田クライミング日記 吉田和正
- ・ロストアロー キャメロット Z4 取扱説明書